

有島武郎研究

— 瞳憧憬をめぐって —

宮野光男

1

有島の、定山溪における見神体験は、彼の精神史上、忘れることのできない大きな出来事の一つであろう。それは人間にとって、個々の体験や、生得的な性癖が、ある一定の規準に従って整理統合され、あるべきところに位置づけられるためには、一つの内面的な体験が、その契機となるからである。有島にとって、それが、キリスト教との触れあいを意味する見神体験に端を発しているであろうことは、すでに、生来の「自然癖」が、「神の外衣」である自然を認める自然観に変化した事実や、運命観の考察において瞥見してきたことであるが、本論では、さまざまな可能性を内包し、その意味では、有島の精神史の原点として位置づけることができるように思われる見神体験の事実を記した日記「明治三十二年二月二一日」の中に見られる、「眼」への関心に焦点を絞って考察してみたいと思う。有島の「眼」への関心は、日記、作品の中に、かなりの用例がみられ、相当意識的であったように思われるが、本論では、それを、「神の眼」畏怖と、「宣言」〔大6・12〕の「Y子」、「或る女」〔大

8・6〕の愛子などにみられる、有島の「眼」への憧憬においてとらえることによって、先に述べた、有島の、フアンニーの「恨多き眼」への関心が、（待）「瞳憧憬」ともいうことのできる、根源的な願望につながっていることを明らかにしてみたいと思うのである。

2

有島の「眼」への関心の一つの特色は、「神の眼」畏怖にあるとすることができよう。

皇天自ら眼あり、願はくは我が眷々の衷心を照覽せよ。〔日記、明32・2・21〕

一時は、自らの死を睹して見神を体験しようとした有島は、その志が、実は「こよなく逸りたるきたなき心」から出たものであることに気づき、「今は唯何をか云はん。我等は死すべからず。意を決して生きざる可からず。』と、その死の決意を翻したが、その時、

彼が、決して死に臆した者ではないことに對する神の理解への期待を、このように言い表わしているのである。勿論、この時点では、明確なかたちでの畏怖の念とは言い難いが、ここに表われている△神の眼▽への期待には、すでに、神との關係が、人格神とのそれであることが可能ならしめる素地が培われていつつあったことを見ることのできるのである。なぜならば、神が人格的存在であることを表わすための、聖書における一つの手法が、△神の目▽という表現だからである。^(註3)

ところで、有島にとっては、△神の眼▽は、つねに避くべきものとして認識されていたようである。しかもそれが、

肉に強くして靈に弱く、財に裕かにして心貧しき我、加ふるに生來の鈍根を以てして、屢々神の眼を避けんと欲す。〔日記、明33

・5・25〕

という告白などにみられるように、それは、有島にとっては、たんなる比喻表現ではなく、否定的自己認識と相俟って、実感として受けとめられ、その精神構造に定着していたのである。△彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。^(註4)▽というように、聖書の中で、△神の眼▽を避けなくてはならぬ者として描かれているのは、△禁断の木の実を喰いかいだ▽のために△楽園▽を失った△原人▽アダムとイヴである。このところ

でいう、△神の顔を避けて▽とは、△神の眼を避けて▽と同義語的表

現であり、^(註5)有島の自己認識は、常に、このアダムの末裔意識ともいふべき、神の前にはとうてい立ち得ぬ罪人としての否定が、その基調をなしていたことを物語っているのである。ただ、当時―札幌農学校時代から渡米まで―の有島にとっては、それが、信仰における自己肯定、神の愛の実感のための、一種のスプリング・ボードであったということ、神を信じることを前提とするかぎり当然のことでもある。^(註6)しかし、有島の見神体験が、森本厚吉の、キリスト教徒たれ、という強い懲懲にであったとき、

君は sinful に就いて深く極め、最も之れを知る事を得るに反し、余は sin の多きを知りながら之れを真に深く心に占めて恐懼措く能はざるが如きに至る事能はず。〔日記、明31・12・27〕

と、どうしても、森本の問題とする△原罪▽の実感を持ち得ず悩んだ有島が、

嗚呼慕しかりし死よ。汝は終に我が有となりぬ。我が生血にあらざんば、森本兄は復活する能はず。〔中略〕クリストの愛は世界万劫の民を救ふ足に在る、而して我はクリストに比して大海の泡沫、泰山の土塊なり。而して有為多望なる可き森本君一人を救ひ得たりとせば、我は現世界に於て大に為すありし所のものなり。

〔同、明32・2・16〕

というように、罪の問題を、基本的には不問に付したま、森本への

同情を基調とする信仰告白へと自己転換していった事実、換言すれば、自らの可能性の内側における信仰告白としての見神体験であったということが、その、義なる神を、畏怖すべき△神の眼▽として実感しながら、本来、それに対して、贖罪の主として対置さるべきキリストをも、義なる神と同様、厳しい罪の告発者としての位置づけを招来してしまっている、という意味では、特異な点としなくてはならぬところであろう。有島の日記には、信仰の対象としてのキリストを表わす場合、それは、△基督の跡に從はん事の如何に難▽〔明34・3・18〕いかを思はずにはおられない、その△愛を真に解せん事▽を求めながらも、△心は満たされず▽、ついには、△我が基督に到らんは駱駝が針眼を通過するよりも難し▽〔明33・5・25〕と思わねばならず、かえて、真の意味での贖罪愛を実感することの困難さがつきまとっていたのもそのためなのである。

有島の、このようなキリスト理解の中で、ただ一度だけ、例外的なキリストが描き出されているところがある。それは、

かの若人の面には罪悪の塵影だになし。若人は徐ろに首を拾げて我が顔をちつと視つめぬ。其眼の底には潤みありき、其唇には慄ひありき。其眉根には無限の恥色ありき。其頬には云ふ可からざる同情ありき。〔日記、明36・2・8〕

という、慈眼をもったキリストである。

有島は、なぜ、このような慈愛に満ちた、柔和な面持のキリスト

有島武郎研究 ― 憧憬像をめぐる ―

を描き得たのであろう。

実は、このキリストが描かれているのは、あの、△姦淫の女▽^(註8)が語られているところなのである。有島にとつては、聖書のこの部分―「ヨハネによる福音書」第八章第一節―第一節―は、△新約聖書中深く愛読し▽、△読む毎に云ふ可からざる美感胸に逼りて、余の如きすら清き高き涙に誘はれざるを得ざる▽ところであったにもかかわらず、△事実にあらずして後人の挿入せるもの▽であり、△架空の説話として葬り去▽らねばならぬ思ったところなのである。つまり、この部分は、有島にとつては、△姦淫の女▽を、△Elegyと呼ぶことの自由さを、聖書理解の中に持ち込むことがゆるされていたところだったのである。その自由さの中で記されたキリストであるがゆえに、例外的に、△潤み▽のある、慈愛の眼をもったキリストを描くことができたのであろう。たしかに、△姦淫の女―Elegyの話の後半の部分、つまり、キリストによって、女の罪に対する告発への反論と、女に対するいましめは、前半の部分にくらべると、聖書や、その註解書の記述を出ない、観念的なものになってしまっており、その自由さは失なわれているように思われる。しかし、そのような記述の中にあつて、なお、女を△云ふ可からざる懺悔と、懺悔と自責と感謝との涙に震ひ懺▽かしたというのも、実は、その眼に示された愛の可能性によるものであろう。このように、有島の感覚では、正典のキリストではなく、いわば△説話▽的部分のキリストを描くときにのみ、有島を全面的に受容するキリストが可能になっているというところに、当時の有島の信仰の特色である、△神の眼▽畏怖の逆説的表現をみる事ができるので

ある。

3

有島が、その生活において△愛の輝きにうる▽む△*begot*▽の眼を、△権喜と自責と感謝との涙▽をもって△震ひ戦▽かした△若人▽キリスト―それは、おそらく、△ベタニヤの MARIA▽をし（註） *poetic woman* たらしめた、△愛の瞳▽の持主であつたにちがいないが―の眼を、捜し求め、ついに探りあてたものが、ファニーの△恨多き眼▽だつたのではないだろうか。

ファニーは、有島をして、△天使の前に立ちし心地▽〔日記、明37・9・16〕にならせ、有島を、その根底から△聖からしむ▽〔同、8・2〕る力を秘めた△清き導者▽〔同前〕であつた。そのファニーの△恨多き眼▽は、有島と同じように、眼に関心をもち、その中にキリストの愛を語ろうとしている遠藤周作の作品における△眼▽―△私の小説のなかには「犬」や「鳥」がよく出てくる。そしてその犬や鳥の眼は私にとっていわば基督の眼のイメージなのであり―それがやがて「沈黙」のなかの踏絵の基督の眼まで成長していったのである▽―とは、根本的に異つた△眼▽であるということができる。つまり、有島は、ファニーを、媒体としての眼の持主としてではなく、あくまでも、存在それ自身が、有島に対して、一つの特別な意味をもつた実体としての△眼▽の持主として認識していたのである。（註）このことは、△*begot*▽の、△愛の瞳▽憧憬を実現せしめたのが、△若人▽キリストであつたという意味で、ファニ

―は、有島にとつてキリストそのものの、論理的にはキリストの代理的存在だつたことができるのである。

有島の作品のなかには、このようなファニー系列の女性、つまり、魅力的な眼をもち、存在それ自身が、相手にとつて喜びと慰めを与えうるような女性が何人か描かれている。このことは、憧憬眼というかたちで、換言すれば、永遠の女性追究というかたちで、有島のキリストが求め続けられていたということを表わしていることにもなる。

以下作品の世界において、魅力的な眼を持った女性を追究してゆくわけであるが、有島に、そのような、憧憬眼ともいうべき根源的な願望をもたしめた内的要因の一つとして、△神の眼▽の一種の変形である、△何處か高い處から人間の活動をアミーバの動くのを見る様に見てゐる眼▽〔足助素一宛書簡、大5・8・8〕のあつたことを指摘しておきたいと思う。運命観、自然観の考察において、有島を不可抗的に支配する△意志▽の存在を指摘したが、このような、あるものの△眼▽―作品の世界では、△悪魔の眼▽として形象化されているものでもあろうが―を、その存在の背後に感取していったということは、自律的人間追究を志向する有島の、内的矛盾の一つの顕現として興味深いところでもある。

4

ファニーの△恨多き眼▽の特徴を、その外面的表徴において最もよく受け継いでいるのは、「或る女」の愛子の眼である。明治四四

年一月より「白樺」に連載され始めた「或る女のグリンプス」の段階で、すでにファニーの血脈をひく女性であることを示す「大きな美しい眼」、A羊のやうに柔和な眼「六」を持った少女として描かれているが、それが、さらに積極的な意味をもった女性として描かれている「或る女」後篇が執筆されるまでに、いわば、その愛子の存在と内面性とをより明確にするための、中間的存在として位置づけることのできる女性がいる。それは、「宣言」〔大6・12〕のY子である。

Y子も、ファニーや愛子と同様、非常に印象的な眼を持った女性として描かれているが、「宣言」の主要人物A、Bによって、それぞれ、つぎのように言い表わされている。

A、Bともども、Y子の「大きな謎」を秘めた眼の凝視に心奪われてはいるが、A、Bの、Y子の眼を通してのY子像には、おのづから、以下に示すような差がみられるようである。

Bは、Y子の眼の中に、A黒い火のやうに燃え「瞳」、A虚ろな、然し緊張した「か」が「やき」を、彼女の本质として見ているのである。それは、A Y子さんはAを愛すると思つて居るのに、その奥の方に潜む誠実が、それを裏切るのではないか「という」A懼ろしい忌はしい疑惑「を思わせる」A眼「であった。この」A疑惑「は、Y子の、Bを愛している者であるとの告白によって事実となるわけであるが、A眼」に関する描写の差においても、AがY子のA眼の

繰り出す言葉として、Y子の心の声を聞くことができたのが、Y子がBを愛している事実を知ったときであったのに対して、Bは、A Y子さんは大きな澄んだ眼をまんじりと開いてあたりを見廻したが、僕に連れ添うて牧師の居るのに眼をとめると、その眼は、僕にだけ分るやうな複雑な言葉を語つて居た「というように、その関係において、AよりもBの方がより緊密の度の強いものであり、Bがすでに恋の勝利者になるべき存在として設定されていたことを知ることができるのである。

たしかに、BのY子の眼に関連したY子像は、Aのそれに比較して、かなり内容のあるものになっていることを知ることができるのである。

如何かして、ひよつとY子さんと眼を合せる時、幽霊に遇ひでもしたやうに、身の毛のよだつ感じを受ける事がよくあつた。人の表情は自然の印象と同じく、どれがその人本来の表情と決めてかゝる事は出来ないものだが、如何かした拍子に、あれがY子さんかと思ふやうな、餘り飛び離れた表情に出遇ふので、思はずぎよつとするのだ。Y子さんの祖先が、ふとY子さんの瞳孔を借りて現世を覗いたのか、それとも未来のY子さんが、逸早く臆ろげながら、その肉体に宿つて現れ出たのか。ある時には其の表情に極度の屈託と悲哀とが表現され、又ある時には鉄鎖を断ち切つたプロメテウスのやうな、極度の奔放と自由とが表現される。ある時には瞳は黒い火のやうに燃え、「中略」瀕死の熱病者が、無意

識に、何かを見詰めるやうな、虚ろな、然し緊張した眼のかゞやきを、ある時は、Y子さんを襲ふ回帰的な発熱の所為かと思つて見た。その頃Y子さんは実際三十八度近い熱が出たり潜んだりして居たのだ。ある時は、ぶしつけに其の訳を詰り問うても見た。さう云ふ時Y子さんは何時でも非常に不安な顔付をした。然し返事は屹度病氣だからと云ふに過ぎなかつた。或はさうなかと自分で考へて居た辭に、僕は「嘘をつけ」と心の中で思つた。

如何かすると懼ろしい^{いまま}忌はしい疑惑が、僕を襲ふ事があつた。Y子さんはAを愛すると思つて居るのに、その奥の方に潜む誠実が、それを裏切るのではないか。僕は驚いて自分をたしなめたが、ともすると同じ考へに引入られた。

△僕は久遠の童女を讚美するVというBは、しかし、△眼を押し拭つてY子さんを眺むべき立場に立つたVのである。そして、△今は、一少女と云はうか、童女と云はうか、僕のやうな女の傍觀者に取つて、一番心を索く時期を乗り越してしまつたV Y子の印象を、このように言い表わしているのである。

Bの、このところに描き出しているY子像には、少女憧憬論もだが、その△memoriosis V「愛身」をもつて、少女ではなくなつたファニーを、つまり△恨多き眼Vをもつたファニーを思わせる設定になつていゝるにもかかわらず、むしろ葉子の内実に類似した印象を持つていゝるようである。先にも述べたように、眼の言葉を持つ

た存在であることもその一つの特徴であるが、真実の愛を求めらるる△誠実Vが、△裏切りVをもあえてなきしめる存在としての予感を指摘することもできるということは、葉子の生を根本から支えている、愛の論理追究の一つの可能性との本質的一致を見ることができるところでもある。多くの謎を秘めたY子の可能性への予感、それを察知しうるBという存在との關係において、はじめて示顯しうる特性であるという意味で、あくまでも關係の中で生かされる存在であることも、その一例といふことができよう。そして、これらの、葉子との等質性を、論証ぬきに、内面的に支えているものが、△黒い火のやうに燃えVる△瞳Vなのである。葉子の印象的な眼の描写の中に、△その存在の中から黒い焰を上げて燃えるやうな二つの眸V「三六」のあつたことを想起することができるのである。そして、Y子と葉子の共通のイメージである△黒い火「焰」Vの△瞳「眸」Vに眼を向けているBが、Y子の△好意とは知りながらV、△ロゼツチの「ピヤトリス」^(註)の見事な複製Vを、△聖座から引きずり降りVてしまつたところに、Bの、Y子に対する期待が、Aのそれとは全く異つたものであつたことを、象徴的に示しているように思われるのである。つまり、BにとつてY子は、あくまでも、現実の恋の対象であり、永遠の女性としての位置づけはなされていなくなつたのである。

ところで、Bが恋の勝利者であるからといつて、Aが、Y子について、何の理解をも示し得ぬ存在としてのみ描かれていたといふのではない。むしろ、Aもまた独自の、BにはみられないY子観を持つていたのである。

AがY子の眼の中にみたものは、△あの天使の顔にふさはしい眼が、邪姪の相に引きつけられ易い眼だつたらどうするVという、一種の懸念であった。登別温泉での出会いにおいて、Aを恋の虜にしてしまったY子に、Aは△ぐん／＼引きつけて行く力Vを感じているのである。そして、Aの不安におののく恋心は、ふとY子との恋の不成立を思い、心にもない罵言を、Y子のイメージに叩き付けるのである。△黒い髪の毛が何だ。―あの病を秘めてるらしくも見えない貧弱な胸が何だ。大きな謎のやうな眼が何んだ。―あの天使の顔にふさわしい眼が：V。勿論、△美しく刻まれたエポニーの塔のやうに、形のいい顔の上を飾る黒漆の髪―乳房のふくらみのない靈感的なその胸―謎のやうな大きな眼：Vへの讚美がその背後にはあり、それが本音であり、罵言は、いわば△酸っぱい葡萄Vを詰る声である。しかし、△天使の顔にふさわしい眼Vが、△邪姪の相に引きつけられ易い眼Vではないかという懸念は、AのY子觀の奥深いところに巢喰つている、不鮮明ではあるが否定しがたい、一種の期待―それは、おそらく、ファニーの△恨多き眼Vに通じるものではないかと思うのであるが―でもあったのではないだろうか。だから、Y子の眼が、Aにとっては、その心を△駆りたてるV、△恨むやうな眼Vというように言い表わされているのではないだろうか。

このことは、恋に破れたAのY子觀の中に、ファニーの△恨多き眼Vにみられる、聖性と魔性との同時的存在への期待を見出すことができるかという問でもあろう。△邪姪の相に引きつけられ易い眼Vと、△天使の顔にふさわしい眼Vとの対比の中に、魔性と聖性の対比を彷彿させているようでもあるが、この問題説明のために、

有島武郎研究 ― 隨憶懷をめぐって ―

Aの夢をとりあげてみたいと思う。

Aは、Y子の印象を夢に託して、つぎのように表わしている。

その夜寝床に這入った僕の眼の前には、まざまざとポッチチエリのヴィーナスの誕生の畫が出現した。今摘み取られたばかりな薔薇の花を弄びながら、楽しさうに、輝き、躍り、微笑むあの小刻みな春の波が、まづ眼に浮ぶ。その波の上に拵がる空虚な、然し充実した大きな空間が、次ぎに思ひ出される。その真中に描き出された、純粹な希臘風とはいへない優美な一種のポーズ。水の泡か、人か、海妖か、まだ乾き切らない、潤澤な、栗毛の髪を支へかねるやうに首をかしげて、夢からさめ切らない眼を稍々細めに正面を見つめながら、細々と立上つた處女の姿。無限の生と喜びとを生み出すべき處女の姿。行きつまる所まで靈化した豊潤な肉感……。

AのY子像は、たとえば、△僕は餘りにY子に飽和して現身のY子を要しないと思ふ事さへあるVというところにも表われているように、BとY子との關係のように現実性をもつたものではないだけに、―あるいは、ないことを示すために、先にみた罵言がさうであったように、Y子の現実を無視した恣意的なものであった。だからこそ、このように、空想の翼の自由な飛翔を可能にする夢の中で、ポッチチエリのヴィーナスとY子のイメージが重ね合わさっているのであろう。

たしかに、△行きつまる所まで靈化した豊潤な肉感：Vという描

写には、有島の、いわゆる本能肯定論を彷彿させる肉体讚美がある。しかし、この夢の内容が、そのような本能主義—肉体肯定論だけで説明しつくされるかという点、かならずしもそうではないように思われるのである。というのは、有島の夢として語られているポッティチエリのヴィーナスには、△純粹な希臘風とはいへない▽という表現に暗示されているように、△豊潤な肉感▽の極致としての△靈性▽だけではなく、△靈化した豊潤な肉感▽の中にある△靈性▽の悌とでもいうことのできるようなものを見ることができている。つまり、このヴィーナス像に、聖性と魔性とを同時に兼ね備えた、女性としての完成された姿を見ることができているのではないかと思われるのである。それは、いうならば、有島の、poetic womanともいうべき一種の理想像であるが、この考え方の可能性について、矢代幸雄氏の「隨筆ヴィーナス」^(註)を参考に考察してみたいと思ふ。

有島が、ポッティチエリのヴィーナスに、△行きつまる所まで靈化した豊潤な肉感▽を見ることができたのは、△一方にギリシヤ的な知的認識と感覺生活とが盛んでありながら、一方に中世的なる靈的憧憬が熱烈であった彼ポッティチエリの芸術▽△「ヴィーナスの誕生」△に対する卓越した眼識によるのであろう。有島は、弟生馬と同行したフロレンスのウフィツィ画廊で、ポッティチエリの「ヴィーナスの誕生」、「聖母」を觀た時の感想を、△純透▽と記し、△（この二字に大なる苦心あり）▽と註記している。「日記、

明39・10・26」

矢代氏は、ポッティチエリが、△最も哀艶にして悲觀に満ちた処

女マリアを描き、世界一の聖母画家の稱を恣にした▽のと同時に、△近代の感覺と精神とを蒸溜し凝晶したる神經質の精素、鋭敏であり、織妖▽な、△近代人の魂に憑り、夢を犯さずには措かない▽△有心美▽の極致である△精女▽ヴィーナスを描き得たのは、△何人の心中にも任んでゐるを否定出来ない遊女聖者▽△マグダラのマリア▽、つまり△ヴィーナスと聖母とを一人の女性に混ぜたようなマグダラのマリアの芸術的描出に、多情多恨なるポッティチエリの天才こそ最も適合▽していたからであり、△ヴィーナスを描けば聖母の表情が映り、聖母を描けばまたヴィーナスの幽婉が纏綿として離れないポッティチエリは、彼自身マグダラのマリアだったのであろうか。▽「ヴィーナスの誕生」、「北歐のヴィーナス」と述べている。このポッティチエリの、内面における信仰と芸術との葛藤についての指摘は、有島の内面性の問題と相触れあうものであったにちがいない。有島が、Y子を、あえてポッティチエリのヴィーナスと結びつけているのも、おそらく、有島の理想とする女性像、つまり poetic woman の最も具体的な要素である聖性—聖母マリア—と、魔性—マグダラのマリア—のイメージの結合を通して、有島の悩み多き魂の懊惱と聖化への願望とを、その中に見ようとしたことの、一つの顕現であると思われるのである。ただ、有島の場合は、信仰の内容としての△靈的憧憬▽が、Aの秘められた聖性憧憬というかたちで追究されなければならなかったところに、ポッティチエリとの相違点を見い出すことができるのである。

「或る女」の愛子を、有島は、

暗い處に於て明るい方に振り向いた時などの愛子の卵形の顔形は美の神ビーナスをさへ妬ます事が出来たらう。〔三一〕

と描いている。そして、愛子の眼は、△多恨な柔和な▽〔三四〕、△潤ひ切つた大きな二つの瞳▽〔三一〕をもつた△美しい眼▽〔二九〕で、△闇の中に淋しく独りである、その多恨な眼でちつと明るみを見詰めてゐるやうな少女だつた▽〔三一〕といふのである。

このような愛子描写からもわかるように、愛子は、明らかにファニーとY子との外面的表徴だけではなく、その内面性の特徴をも引き継いだ存在として形象化されているのではないかと思える条件が満たされているようである。「或る女」論において、愛子が、葉子の心を根本的にかきみだす存在として形象化されているのではないかという推論を、葉子の詩的女性への変身願望の根拠の一つとして位置づけたが、△眼▽におけるファニーとY子との等質性が云われるかぎり、葉子の愛子観―それは明らかに眼に焦点が絞られていると思われるのだが―は、実質的な、一種の恐れをもつた羨望といふかたちでなされているといふことができるのである。

有島は、葉子の眼を通して、愛子の眼を、

その眼は然し恐れても恨んでもゐるらしくはなかつた。小羊のやうな、睫毛まつげの長い、形のいゝ大きな眼が、涙に美しく濡れて夕月のやうにぼつかりと列んでゐた。悲しい眼付のやうだけれども、悲しいと云ふのでもない。多恨な眼だ。多情な眼でさへあるかも知れない。さう皮肉な批評家らしく葉子は愛子の眼を見て不快に思つた。大多数の男はあんな眼で見られると、この上なく詩的な靈的な一瞥を受け取つたやうにも思ふのだらう。〔二四〕

と描いている。有島は、葉子のこの思いを、△妄念▽だといふのである。しかし、それが全く謂のない云いがかりではなかつたことは、愛子の眼が、ファニーやY子の眼と等質の眼であつてみれば、つまり poetic woman の眼を持った存在であつてみれば、云うまでもないことなのである。このことは、

その眼は相交らず淫蕩と見える程極端に純潔だつた。純潔と見える程極端に淫蕩だつた。〔三二〕

という指摘の中に、ファニーの△恨多き眼▽の魅力の根源である聖性―純潔―と、魔性―淫蕩―との同時的存在が確認され、それに対して葉子が、愛子に対して△一段の憎しみを感じずにはゐられなかつた▽といふかたちで日常化していることを知ることができるのである。

フアーニーの血脈を引く女性を考える場合、「星座」〔大11・5〕のおぬい、「或る施療患者」〔大12・2〕の岡田夫人を忘れることはできない。周知の通り、「星座」が未完の長編であり、人物造形が、かならずしも充分であるとはいえないが、おぬいが、おそらく有島にとって重要な位置を占める存在として形象化されようとしていたことは、やはりその眼が、印象深い女性として描かれているところに、一つの証明を見ることができよう。

清逸にとつては、その眼は、△少し上気した皮膚の中から大きくつや／＼しく輝いて、或る羞みを感じながらも俺から離れようとしてない▽眼であった。しかも△心の底からの信頼を信じて下さい▽と云いながらその△眼はおぬいさんを裏切つてゐる▽眼でもあった。

渡瀬には、△潤みの細やかなその眼をばつちり開けて、探るやうに▽見る眼を、さらに、園に対しては、△何んの恐れもなく、平和に、純潔な、而して園の心におのづと涙ぐましさを誘ふやうな淋しき、―〔中略〕淋しさに似てもつと深いもの、いい言葉はない―を籠めた、黒眼勝ちな眼。慎み深い顔の中にその眼だけがほのかにほ／＼と、そこにつき／＼に開けてゆく世界をより深く眺めようとするやうに見えた。おぬいさんのその眼があつた。而してそれがやはらかく、ともに園の方に寒いまでに澄んで而かもこの上なく暖い光を送つてゐた。▽というやうな眼を感じさせているのである。

おぬいの前に現われる男性との関係の強弱深淺の度合、あるいは

交渉の可能性などが、相手の男性への眼の与え方、換言すれば、男性側の眼の観察のし方の中に表わされているとするならば、有島は、園とおぬいとの関係を、一番重視していたことになる。勿論、全体の構成から考えても、おぬいとの結婚を決意し、その申し込みをする園であり、有島が園の生き方に託した望みは大きなものであったにちがいないが、それにもまして、園に与えられたおぬいの眼が、△藍が／＼つてさへ見える黒い瞳▽の魅力だけではなく、彼女自身の主体的な生き方を、その可能性において暗示しているやうな眼であることに、有島の新しい意図を見ることができるようになるのである。それは、あるいは、△おぬいさんの理想化▽という言葉であらわすことのできるものかもしれないが、Y子も愛子も、ともに受動的に描写されたために、充分にその内面性を、主体的に主張する存在としては描かれていなかった、有島の poetic woman としての女性の姿が、もしかすると形象化される可能性が考えられるものなのである。勿論、この作品が未完であつたということが、逆に、有島の poetic woman としての女性像が、充分に彼の中で醸成されるに至つていなかった事実を物語っているといふこともできよう。しかし、有島の poetic woman 形象への願いが強烈であつたにちがいないことは、「或る施療患者」の岡田夫人の、△世にも稀れなる眼の潤み▽、△凡ての表情を兼ね備へた眉に護られた眼。そこに溜りきつた潤み▽を思う私―亀吉が、彼もまた△岡田夫人のあの湿ひある眼の蠱惑▽に心誘われる者として描かれているところに影をとどめていられると思われるのである。

「星座」、「或る施療患者」と、有島の後期の作品にまで引き継がれている眼への関心は、あるいは、有島の生涯を通じて追究された憧憬ともいへべき根源的な願望の顕現なのであろうか。勿論、おぬい、岡田夫人などの女性像が、「三部曲」〔大8・12〕刊行時の決意にみられる△新しい衣裳▽〔吹田順助宛書簡、大8・12・16〕形象の意図の中で、積極的に描き出されたものであるか否かについては、大正九年以後の、有島の後期の作品研究の中で、精神構造の解明にあわせて考察されなくてはならないが、たとえそれが、△旧衣を脱▽しかねている状況の中で形象化であったとしても、このような女性像に、有島の精神構造の最も奥深い部分に底流している希求、愛の成就者キリストの代償ともいえる存在のシンボルである瞳への憧憬を、あわせて読みとることができるように思われるのである。その意味では有島の後期の作品「一房の葡萄」〔大10〕にも、△もう一度先生のやさしい眼で見られたい▽少年僕が描かれているが、△僕の大好きなあのいい先生▽が、少年の思いに託された有島の「poetic woman」への憧憬の、あるいは象徴的な表現であったのではないかと考えることができるのである。^(註12)

註1 (1) 「自然観にみられるキリスト受容と定着の考察」、(2) 「教会退会後の自然観をめぐって」、(3) 「運命観の考察」

有島武郎研究 — 憧憬をめぐって —

註2 「フアンイー像にみられる聖性憧憬の考察」

註3 △その地は、あなたの神、主が顧みられる所で、年の始めから終りまで、あなたの神、主の目が常にその上にある▽

〔「申命記」第一章一二節〕

△見よ、主の目は主を恐れる者の上であり、そのいつくしみを望む者の上にある。▽〔「詩篇」第三三篇一八節〕

〔創世記〕第三章八節

註5 △たとい彼らはカルメルの頂に隠れても、わたしはこれを捜して、そこから引き出す。たとい彼らはわたしを目をのがれて、海の底に隠れても、わたしはへびに命じて、その

所でこれをかませる▽〔「アモス書」第九章三節〕

註6 「フレンド精神病院における看護夫生活の意義の考察」

註7 註1(1)に同じ

註8 「『或る女』論(一)―田鶴子と△Ego▽―」

註9 「『或る女』論(二)―田鶴子と△poetic woman▽―」

註10 「私の文学」〔「石の声」昭45・12 冬樹社刊 所収〕

註11 註2に同じ

註12 註1(2)、(3)に同じ

註13 「石にひしがれた雑草」〔大7・4〕の主人公Aのことばとして、△何んにも目的がなくなってしまうと、人間の姿といふものが可なり露骨に見え透くよ。悪魔の眼が冴えてるのも多分はその為めなのだらう▽と表わされている。なおこの部分については、安川定男氏の、△対社会的関連や目的意識から解脱したところに生まれる「悪魔の眼」―

「或る女」のいたるところに光っているVという指摘がある。「『或る女』論」「有島武郎論」昭42・11 明治書院刊 所収」

註14

A・BのY子への認識の差、とくに眼へのそれについては、両者のY子観に対する本質的な差の一例としての指摘が、山田昭夫氏によってなされている。「『宣言』の内部構造」「有島武郎・姿勢と軌跡」昭48・9 右文書院刊 所収」

註15

イギリスの画家・詩人、D・G・ロゼッティの作品。ロゼッティは、神話・聖書・文学作品から得た主題で、叙情的作品を制作、ダンテ・ビヨンの訳詩も有名。「『ジャポニカ』昭46・9 参照。」

有島がこの作家に興味をもっていったことは、明治三六年四月三〇日付の日記に「マゲダレナのマリア」を引いていることから知ることができる。また、「Scribner誌」に掲載されているロゼッティの回想録を読み、その「八畫」と「八詩」とが、「八世紀の詩と畫とををして、大なる屈折をなさしめ、新に生る可き芸術の源頭となす」という意見に對して八言ひ得たりと云ふ可しと賛意を示し、「日記、明37・7・26」、生馬と共に訪れたロマの古蹟で見つけた「八ヶシの花片」を通して、「Rossettiの『ピアトリスの死』で眼をつぶつて面をやゝふり仰いだゆかしい人の手には、此花が置いてあると直ぐ思ひ出して」（日記、明39・10・5）「いるなど、ロゼッティへの関心は大きかったようである。このことは、有島の、文学と繪画との接点を考えるた

め、一つの手がかりを示しているところでもあろう。

註16 朝日選書3 昭49・2 朝日新聞社刊

註17 「『或る女』論(後篇の葉子)」

註18 坂本浩「有島武郎論(下)」『国語と国文学』昭9・2

註19 上坂信男氏の、「八先生の心は、姦淫を犯した女の傍に立つて、『この女に向つて石を投げられるものがあるなら投げ

るがよい』と群衆に叫んだイエスのそれに通じるものがあるはしないかVという指摘(「有島童話覚え書」 本多秋五・瀬沼茂樹編「有島武郎研究」昭47・11 右文書院刊 所収)は、この作品の主題が「キリスト教的な」と限定を加えたほうがよいのではないかVという指摘とともに、示唆に富んだものである。

付記

註1、2、6、8、9、17の諸論は、拙著「有島武郎の文学」(昭49・6 桜楓社刊)所収論文である。

なお、本論は、先に、「『瞳なき眼』まで」と題して行った研究発表(昭和四八年五月三十一日、梅光女学院大学国文学会例会)の一部分を補訂したものであり、「瞳なき眼」については、さらに補訂して、稿を改めて発表する予定である。